



河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

# 教育を 読む

「この盗賊は、宝石だとか、美術品だとか、美しくてめずらしくて、ひじょうに高価な品物をぬすむばかりで、現金にはあまり興味を持たないようですし、それに、人を傷つけたり殺したりする、ざんこくなふるまいは、一度もしたことがありません」と、はしがきで著者がやさしく紹介している怪人二十面相だが、やることは大胆不敵、傍若無人でかつて帝政ロシアの旧ロマノフ王家の王冠を飾り、今は日本の大金持ちの所有となっている六個の大金剛石（ダイヤモンド、時価 200 万円と原文にあるが 21 世紀の今なら 100 億円であろう）を狙う大怪盗二十面相と、それに対決する大探偵明智小五郎とその助手小林少年との、丁々発止の対戦からこの物語ははじまる。



『少年探偵—怪人二十面相』

著者 江戸川乱歩  
ポプラ文庫クラシック  
定価 本体 560 円 + 税

怪人二十面相は呼び名のとおり、あるときは着こなしのいい紳士に、あるときは乞食に、あるときは警官に、またあるときはあろうことか大探偵明智小五郎その人に変装して大泥棒の仕事をし、金持ちを警察を、そして世間をたぶらかし、あざ笑うのである。しかも二十面相は、かならず犯行予告をするのである。「何月何日何時何分に、何々家のお宝をいただきます」と新聞広告まで出すのである。なかなかパフォーマンスの好きな、自意識過剰な怪盗なのである。だがこの不敵な二十面相もついに明智探偵の智恵と小林少年の機転に追い詰められるが、大団円は読んでのお楽しみ。

この本にはストーリーの面白さもさることながら、いまひとつの読み得がある。「昭和」である。遠く離れた昭和がいたるところに顔を出す。例えば明智探偵が急行列車の一等車から降りてくる場面がある。今の新幹線にはグリーン車、座席指定

車、自由席車があるが、昭和の昔は一等車、二等車、三等車であったのである。同じことだが、昔ははっきりしすぎていて、今は差別感の少ない表現をしているのであろう。

列車を降りてきた明智探偵が向ったのが駅に近接した東京駅の鉄道ホテルである。今の東京ステーションホテルである。このように昭和の郷愁に満ちた作品なのだ。同時に丁寧な筆法で情景描写がきめ細かく、読者は作中にいつの間にか引き込まれるのである。例えば、「麻布の、とあるやしき町に、百メートル四方もあるような大邸宅があります。四メートルぐらいいもありそうな、高い高いコンクリート塀が、ズーッと、目もはるかにつづいています。いかめしい鉄のとびらの門をはいると、大きなソテツが、ドッカーリと植わっていて、そのしげった葉の向こうに、りっぱな玄関が見えています。…」

ご一読をおすすめします。